

## “エネルギー問題とOR”特集に当って

高井英造

エネルギー問題が、世界の今後を、経済、社会、政治等々のあらゆる面で規定してゆくキーワードの1つとして、マスコミの表面に登場してから、それほど日がたっているわけではない。しかし、その間、ローマ・クラブのシステム・ダイナミックスによるシミュレーションにはじまり、2回のオイルショックによって加速された危機感に支えられて、この問題に対する数理科学的分析や検討は非常に活発化していると言えよう。

しかしながら、ひとくちにエネルギーモデルと言っても、その対象とする範囲は1企業のエネルギー収支の最適化から、全世界・全エネルギーを包括するものまで真に多種・多様で、それはとりも直さず、この問題のかかえている幅の広さと奥行きを示しているものと言えよう。エネルギーモデルに関してはすでに本誌でも省エネルギー特集が組まれているが、今回とりあげた4編は特に、単なるエネルギー収支や、単純な選択問題ではなく、やや戦略的見地からエネルギー問題に数理的アプローチを行なおうという試みを集めたとお考えいただきたい。

したがって特集のタイトルがエネルギーモデルではなくして、エネルギー問題とORとなっている理由もご理解いただければよい。

「戦略」という言葉を使う以上、この問題については好むと好まざるとにかかわらず、相手のふところに無理に手をつつまざるを得ないところもあるわけであって、そのような視点からも、ここに集められたモデル化のアプローチは示唆に富むものと言えよう。

今回の報文はいずれも、その目的と本誌の性質上、

具体的計算結果よりもモデル化の過程を中心としたものとならざるを得なかったが、結果については別途におおの公開される機会もあろうかと思う。また、将来のわが国あるいは世界のエネルギー選択に関する戦略的アプローチについても、さらにつつま込んだ視点から、各所で行なわれつつある研究について、別に特集を組む機会もあってほしいと考えている。

ORにたずさわるものにとって、常に心がけておかなければいけないことは、種々の意味での「最前線」意識をもち続けることではないだろうか。それは、ある人々にとっては最新の手法をみずから切り開き、あるいは応用していくことであり、またある人々にとっては企業や社会の最も切実な問題に対処していくことであり、かつ、最新の状況や情報に適確に対応していくことでもあろう。

ORがその原点においてみずからは操縦桿を握ることはなくても、むしろないからこそ、常に最前線ともにあることを強く意識しつつ、問題への客観的な接近をはかっていったことを忘れてはなるまい。その意味で、現在まちがいに世界の問題の中の最前線の1つであるエネルギーの将来について、ORは何をもたらせるのだろうか。不確実性に満ちた将来について、ORがそのもてる力を発揮し、そのすぐれた包括力、複雑な事象の構造や相互関係の分析とおこり得る事態の予測等々を通して、どれだけ現実的かつ説得力のある判断基準と将来のあり様についての洞察力を示し得るのだろうか。

われわれ自身の将来に関して、これほどORが広い意味で試されている時代はないのかも知れない。

たかい えいぞう 三菱石油(株)数理計画部